無邪気な恋心

海堂莉子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無邪気な恋心

【Ｎコード】
Ｎ６７４３Ｘ

【作者名】
海堂莉子

【あらすじ】
私に届いた一通の封書。それが、私の日常を少しだけ（大きくはない……はず）変えた。

第1話

封書が届いた。

つるつるとした霞がかった銀色の質の良い封筒だ。表面に私の名前だけが刻印されている。切手も住所も消印もない。後ろを見ても、差出人の名前も住所も何もない。不審なものだった。

中身はあまりにも不可解な内容だった。

１０月〇×日　１８：００より王城にて舞踏会を催しますので、必ずご参加ください。大まかに言えばこんな内容だった。

封筒の中身は舞踏会の招待状だったのだ。

まず、日本国内に王はおらず、勿論王城――城ならあるが――などあるはずもない。それに私自身高貴な身の上の出自なわけでもなく、ごくごく普通の一般人であり、舞踏会など見たことも出席したこともない。ドレスを着たことさえない。それらの点を踏まえ総合的に見た結果、これが誰かの手の込んだ悪戯であり、恐らく私と同姓同名の誰かと間違えて家のポストに入れてしまったのだと判断した私は、それを机の上に積んであった資料の上にぽとんと落した。

そんなことがあったことなど全く頭の中から消え去ったある日のこと。

学校から戻った私は、ある異変に気付いた。

テレビ画面に一枚の紙が張り付けられていた。

テレビがデジタル化した今、私の部屋のブラウン管テレビはその役割を終えた。新しいテレビを買うのも面倒で、さらには処分するのも面倒、押入れに移動するのも面倒、結局放置していたそのテレビ画面に紙が張り付けられていたのだ。

『舞踏会開催のお知らせ』

そう大きく記された用紙は、恐ろしく事務的な内容だった。

そのお知らせを読んで、約1ヶ月ほど前に届いた招待状を思い出

した。馬鹿馬鹿しいお知らせの内容に腹が立って、ぐしゃぐしゃにしてごみ箱に投げ捨てた。

ただ、これは手の込んだ嫌がらせどころの騒ぎではない。何者かが私の部屋に足を踏み入れ、わざわざこの忌々しいお知らせをテレビ画面に貼り付けていったのだ。

自分の部屋に見知らぬ誰かが足を踏み入れたと思うと、言い知れぬ恐ろしさと気持ち悪さを感じ背中を冷たいものが走った。

「まさか、ストーカーじゃないよな?」

口に出して、その言葉に恐ろしさを覚えた。

警察に届けるべきだろうか? イヤ、警察に届けたところで、本気にさえしてくれないだろう。もしも、あなたなんかにストーカーする人いないでしょ、なんて鼻で笑われたら、警察署で暴れてしまう危険性がある。そんなくだらないことで、留置所送りにされるのも考えものだ。

誰か男友達に頼んでみようかとも考えたが、その考えもすぐに?き消した。私の男友達にそういった類を相談できる相手――厳密に言えばストーカーを排除できるほどの逞しい男――はいない。

「あいつらに頼んだって足手まといになるだけだし、自分でやっつけた方が早いよな」

母には絶対に相談しない。相談したら、大袈裟なことにされてしまいそうだ。

結局私は何もしなかった。防犯カメラを部屋に取り付けてみようかとも思ったが、そうすれば母にバレる恐れがあるし、防犯カメラを買うだけのお金も悲しいことになかった。

ただ、帰った時は部屋を隅々までチェックしたし、家の周りに不審人物がいないかどうか気をはって過ごした。

その後、部屋が荒らされたり何かを盗まれたり変なものが置かれたり貼られたりすることもなく、不審人物が周りをうろついている事実もなかった。

私は、その日の出来事を決して忘れないだろう。イヤ、忘れられないだろう。

不審人物の形跡が全くないことに少しばかり気を緩めていた日曜日の午後、学校の課題に手をつけていた私は妙なもの音に顔を上げた。

タプン、という音だろうか。水に手や足を入れた時のような、それとも池の鯉が尾びれで水を立てた時のようなそんな音だ。

私の部屋の中に水槽はない。飲み物を飲んでいたわけでもない。水と呼べるものはこの部屋の中にはなかった。

不思議に思い顔を横に向けた瞬間、私は凍りついた。イヤ、小さな悲鳴くらい叫んでいたかもしれない。

そうなってもおかしくはない光景を私は目にしていた。

ブラウン管テレビの画面から人が這い出て来ようとしていたのだから。ホラー映画のあの人物を思い出した私は、逃げることも出来ずにただその光景を見守っていた。

ただ一つ救いだったのは、這い出て来ようとしている人物が長髪でないことだろうか。なんであの長髪は恐怖心を倍増させていたと私は思うのだ。

ずり、ずずりと這い出て来た人――若しくは霊と呼ばれるもの――は、大きくふぅっと息を吐くと立ち上がり、パタパタとスーツをはらって身だしなみを整えた。

「お初にお目にかかります、川村亜美様。私(わたくし)、お迎えにあがりました」

すらりと伸ばした背中をしなやかに折り曲げ、慇懃丁寧にそう言った。

「あんた誰だよっ。おっ、お化けか？」

人には秘密にしているが、私は不可思議現象に滅法弱い。お化けや霊、妖怪、未確認生物。全てお断りだ。

「いえ、私はお化けではございません。名はワットと申します。こちらに参るのにこのルートしかございませんで、少々窮屈ではござ

いましたが、失礼ながら通させて頂きました。不格好を晒し、申し訳ございません。亜美様も知ってのとおり、今宵は舞踏会でございます。私、亜美様をお迎えにあがりました」

丁寧過ぎるもの言いと胡散臭い笑顔に鼻じらんだ。

「てめぇかっ。あの訳の分からん招待状とお知らせを貼っ付けて行きやがったのはっ」

お化けじゃないと分かった私に怯えはなく、怒りだけが腸を煮えくりがえっていた。

男のネクタイを締めあげ、耳元で怒鳴り散らした。

「亜美様は凶暴でいらっしゃるようで。ですが、殿下はそういった方をお嫌いではないようですので、ぴったりではないでしょうか」

「何ごちゃごちゃ言ってんだ、てめぇ。はったおすぞ」

「はったおされるのは本望ではございませんので、少々手荒ではございますが、失礼させて頂きます」

にっこりと微笑み、そう言うや否や、私の腹部に強烈な痛みが走った。マズいと思った時には既に私の意識は殆ど飛んでいた。

「申し訳ございません、亜美様」

てめぇ、ぜってぇ許さねぇ。その言葉は口を吐いて出ることはなかった。

第1話（後書き）

新連載です。
平日更新でやっていきます。
読んで下さるとうれしいです。

第2話

ボソボソと数人の声が飛び交っているのを近くで聞いたような気がして目を覚ました。

目の前には見慣れないドレスを着せられた私が、数人の女性にメイクを施されている姿がそれはもう大きな鏡に映し出されていた。

さほど長くもない黒髪が器用に後ろでまとめ上げられている。

自分で言うのもなんだが、悪くない。

「って、違うわっ。あんたら誰よ？　人攫いかっ」

がばりと立ち上がり、彼女達の手を振り払って怒鳴った。

私が４人――後ろに１人、前に３人いた――を威嚇して睨み付けると、困惑したように顔を見合わせている。

「あの馬鹿丁寧でいけすかない男を出せっ」

手を伸ばそうとした１人の女性から、触れられないように捕われないように後退り、力の限り叫んだ。

「本当に凶暴な方ですね。あまり彼女達を苛めないで下さい」

「出たな、誘拐犯。その顔を見れないものにしてやるわっ」

それはお断わり致します、と苦笑する。

男――確かワットとか言ったか――は、彼女達に目で指示を与え、退出させた。

「私を今すぐ家に帰せっ」

「バカを言え。今すぐ帰せっ」

「亜美様を部屋にお帰しするとお約束いたします。けれどその前に舞踏会に出て頂きたいのです」

「お帰りになりたいのならばお好きにどうぞ。ただ、亜美様に帰り方がお分かりになるのですか？」

わざとらしく残念そうに首を傾げる。

「っ。てめえがさっさと帰せば済むだろがっ」

私は再び奴のネクタイを締め上げて怒鳴った。

胸ポケットからハンカチを取出し、落ち着き払って飛び散ったであろう唾を拭き取っている。
全くもっていけ好かない男だ。
「まあ、落ち着いて下さい。私の願い事など取るに足らないものです。ほんの二時間ほど舞踏会に参加してくだされればいいのです。会場にいてさえ下されば。そのあとは私が責任を持って亜美様をお部屋にお帰し致します。お母上が戻られる前に必ず送り届けるとお約束いたします。どうかお願い致します」
「知ってるか？　あんたがやってるのは強迫だ。……ちゃんとハハが帰る前に家に戻してくれるんだろうな？」
ええ勿論、と微笑むワットを心の底から殴りたいと思った。
「分かった。出てやろうじゃねぇか、その舞踏会とやらに。言っとくけど、行儀良くなんて期待するなよ。ダンスも出来ないからな」
「亜美様が男前なのは、十分承知しております。料理は沢山ご用意させていただいておりますので、存分にお楽しみくださいませ」
にこりと微笑むワットのネクタイを漸く解放した。
「ところでここどこ？」
「ここは……」
「ちょっと待てっ。それ以上言うな。これは夢だ。そう、これは何から何まで夢」
私は自分自身に言い聞かせた。これが現実だったとして、どうして信じることが出来るだろうか。全て夢だと思っていたほうが気が楽だ。理解できないことを考えても仕方ないのだから。
「夢、ですか。そう思って頂いても結構です。亜美様、そろそろ支度に戻って頂きたいのですが」
うん、と素直に従うと先程の４人組が再び現われた。
「さっきはごめん。あんた達に不快な思いさせたね」
「いえ、戸惑われるのは当然ですもの」
４人の中で一番年長――といっても２０代だろう――の女性がにこやかにそう言った。他の方達もニコニコと笑っている。

「では、時間をロスした分スピードを上げて参りますよ」
頼もしいその女性は、年少の3人に頼られているのが分かる。
私は暫くの間、彼女達のされるがままにされていた。
一度舞踏会に出るとなると、腹も据わり覚悟も出来る。だが、それでいて夢だと思っているので、気楽なものだった。
私は参加することに意義を見いだされているようなので、多少の無礼も許されるだろう。
私は全く緊張していなかった。寧ろどんな料理があるのかと、楽しみな程であった。

扉が開かれると、そこはきらびやかで眩しく、私は目を細めた。
女性のドレスのなんと色鮮やかなことか。私の水色のドレスは初め見たときは度胆を抜かれたが、この中に至っては地味な方であるようだ。
何故か会場の視線がこちらに向けられているような気がした。
「みな亜美様を御覧になっているのです」
私の手を取りエスコートするワットが小声で囁いた。
「なんでだよ？　私に喧嘩売るためか」
「何を仰っているのですか、亜美様の美しさに注目されておいでです」
「あはは。面白いな、その冗談」
笑い飛ばせば、残念なものでも見るような目を向けられた。
ムカつくぞ、ワット。
「まあ、いいですけどね。亜美様にその自覚がないのは火を見るよりも確かですし」
自己満足したように、何度か頷いている。勝手に満足しないでもらいたいものだが。
「さあ、こんなところで立ち往生していても何も始まりません。参りましょう、姫様」
「お前、次姫様とか言ったらぶっ殺すからな」

「はいはい、承知しました」
「はい、は一回だって習わなかったのか？」
表情は始終にこやかに、だが、交わされる会話は何とも物騒なものだったと記憶している。
中央にはダンスフロアがあり、幾人かのペアがダンスを楽しんでいる。立食フロアには、料理を皿に乗せて意中の女性に振る舞おうとする男性がせっせと作業をしている。
ざわざわとあちこちで談笑がされており、そのお行儀の良い雰囲気に一気に疲れを感じるのだった。
「おい。こいつらいつもうふふ、おほほって笑ってんのか？　なんか気持ち悪いな。本当に面白くて笑ってるようには見えないけどな」
「それが社交界というものです。時として愛想笑いというのも必要です」
「まあね。でも、ここにはそれしかないじゃないか。本当に楽しそうにしてる奴なんていないんだな」
「残念ながらそうかもしれませんね。野望と策略、腹の探り合いです」
ワットもまたそういう社交界を良く思っていないのか、眉間に皺が寄っている。
「ワット。お前が連れて来たのはその者か？」
声の方に振り向くと、私と同じくらいの背丈の――約１６５？ほど――少年がにこやかにワットと私を見ていた。
「はい、そうでございます。殿下」
殿下と呼ばれたその少年を、私は無遠慮に観察した。

第3話

無邪気な瞳に無邪気な笑顔。醸し出す雰囲気全体が無邪気な少年だった。

誰だって成長するにつれどうしたって経験する嫌な現実を目の当たりにし、否応なしに擦れていく。この少年には、そんな擦れた感がないのだ。

この舞踏会でさえ渦巻く悪しき感情を見てもなお、この純朴さを保てるものなのか。悪しきものを遠ざけられて育ったのか、それともそれすらも彼の無邪気さには適わないというのだろうか。

いずれにしろ、私は少年のその純朴さに憧れ、羨み、そして妬んだ。

「亜美様、こちらは本日の主役であらされますレイ殿下でございます」

「主役？」

「はい。本日の舞踏会は、レイ殿下の１６歳の誕生日をお祝いするものであり、婚約者をお探しする目的でもございます」

少年の誕生日だったのか。

「そりゃ、おめでと。あんたにとっていい年になるといいな」

相手が王だろうが王族であろうが、態度を変える必要はないと思っていた。ワットだって私の礼儀をどうのこうの言うつもりはないようだ。

王子レイは、私の無礼に驚いたのだろうか、私を凝視したまま固まっている。

「おい、レイ。大丈夫か？　なあ、ワット。レイ動かないぞ。大丈夫なのか？」

話しかけても微動だにしないレイをどう対処していいかわからず、ワットに助けを求めた。

苦笑を浮かべるだけの薄情者のワットが助けを差し伸べるつもり

がないと悟ると、私はレイの顔を覗き込んだ。
「ホントに大丈夫か？」
間近でレイの瞳を覗き込んだ。青とも緑とも言えない美しい瞳が突如大きく見開き、遠ざかっていった。
少し距離を詰めすぎたのだろうか。驚いて、後方に飛んだレイは、海老を彷彿とさせた。
「だだ大丈夫っ。本当に大丈夫だから」
何にそんなに慌てているのか分からない。
変な奴だ。
「大丈夫ならいいけど、具合悪いなら無理するなよ？　なあ、ワット。お腹すいたから食べてきてもいいか？」
「ええ。私は少し挨拶回りをして参りますので、ごゆっくり」
頷いて、別れた。
食事の置かれているスペースには、あまり人はいない。みなお喋りやダンスに忙しいようだ。間違っても食事をがっついたりする者はいない。
皿を手に取り、何を食べようか思案していると、隣に気配を感じ顔を上げた。
「なんだレイ。あんたもお腹が空いたのか？」
「空いてはいない」
空腹でもないのに、なぜか私の隣りに居座ろうとしているようだ。
「なんだ。じゃあ、どうした？　もしかして私が一人なのを心配して来てくれたのか？　それなら私は大丈夫だぞ。あんたは婚約者を探さなきゃならないんだろ？　ほら、女性達があんたを見てる。皆話したがってるんじゃないのか」
「イヤ、俺は」
「なんだ？　何か言いたいなら、ちゃんと言わないと伝わらないぞ」
「俺は……、あなたといたいっ」
顔を真っ赤に染め上げて、上目遣いで私を悩殺しようとしている。
勿論、無自覚でだ。

無邪気さは時に武器になるのか。
「そうか。なら、いればいいんじゃないか？」
そう答えると、パッと花開くように笑顔になった。
あっ、耳が生えた。ああっ、尻尾も。
勿論それは幻覚でしかなく、実際に生えているわけではない。だが私には、レイの頭とお尻にそれらが生えているように見えたのだ。まるで犬のように。
どうやら懐かれたようだ。尻尾をふりふりと大ぶりに振り、私に微笑みかけるレイは何とも可愛らしい生き物だ。
「これが凄く美味しいんだ。俺のお気に入りだよ。亜美殿にもぜひ食べて貰いたいんだ」
私の皿を横取りし、甲斐甲斐しく料理を取ってくれる。
料理自体は日本での食事と変わらない。料理の名前こそ違うようだが、その中身は同じものだ。レイがお気に入りだと言ったのは、スパゲティで、恐らくボンゴレだろう。
ニコニコと皿を手渡され賞味すると、やはりそれは日本で言うところのボンゴレだった。
「美味しいな。日本と変わらないから、私には馴染みやすいんだな」
「本当？　じゃぁ、もっと食べて。これと、これとこれが俺のお勧め。それと、これは料理人がお勧めだって言ってたんだ」
これでもかと乗せられていく料理を渡された傍から片付けていく。突飛した料理はなく、全て味わったことのあるものだった。
日本の高級ホテルで料理を食しているのと変わらない。滅多に味わうことのできない高級感漂う料理を心行くまで味わうつもりでいた。
「んん、のど渇いた」
そう口にすれば、レイが飛んで行って飲み物を手にして戻って来た。
シャンパングラスに入ったそれは、とてもジュースとは思えなかった。未成年――１９歳だ――の私がアルコールを摂取することは

ない、といわなければならないところだが、実のところいける口だ。ハハの晩酌に付き合わされているからなのだ。

ありがとう、と受け取ってまず一口。

甘みのあるそれは、カクテルのように飲みやすい。だが、恐らくアルコール度は強そうだ。大量摂取すると危険なことになりそうだ。

自分の摂取限度量は理解しているつもりでいる。この強さなら、二杯くらいで止めておいた方がいいかもしれない。

「レイ。あんたはもっとご令嬢たちと話しをした方がいいんじゃないか。さっきから心なしか鋭い視線を感じる。私が視線で串刺しになる前に挨拶の一つもして来い。私は少し夜風に当たって来る」

ポスト婚約者を狙うご令嬢たちの鋭い視線は始終感じていた。そんなものを一々気にしているわけではないが、一言も話せずに終わるのは彼女たちがあまりに可哀想だ。

それに、先ほどのお酒が思ったよりもアルコール度が高かったのか、少し酔いざましがしたかった。

「分かった。でも、すぐ戻って来るから。バルコニーで変な男に話しかけられても相手にしちゃダメだからね」

「はいはい、分かったよぉ」

手を振り、何度も振り返り私を確認するレイを見送った。

レイがご令嬢たちと話し始めたのを見届けると、バルコニーへと足を向けた。

バルコニーには人気はなかった。それをいいことに大きく伸びをする。

「おっ、目の前は海なのか?」

暗くて気付かなかったが、ザザンザザンと波の音が聞こえる。バルコニーから下を覗き込む。降りられない高さではない。

「ちょっとくらい抜け出してもいいよな?」

誰にともなく問い掛けた。

「いいよ」

そして、それに自分で答え、ドレスを捲くしあげ足を上げた。

第4話

「ちょっと、何してるだっ」
慌てた声とぐいと引っ張られる手首。
今にもバルコニーから飛び降りようとしていた私を引き止めたのは、ご令嬢たちのところへ行ったはずのレイだった。
「何って、下に降りんの」
キョトンとそう言うと、驚きに目を見開かせて私を注視している。私の真意を探るかのように。
「酔ってるの？　それとも逃げるつもり？」
無邪気な笑顔が消えていることに驚きを感じていた。無邪気なだけの少年ではなかったのだ。
「酔ってないぞ。逃げるって何から？　私はただもっと近くで海を見たいだけだぞ？　ワットには内緒な。知られたら怒られそうだ」
「俺も行く」
駄々を捏ねたように聞こえなくもないその声に思わず吹き出した。
「怒られてもしらないぞ？」
大丈夫、と何を根拠にそう言ったのかは分からなかったが、レイは自信有りげ笑むと身軽にバルコニーから飛び降りた。
「亜美殿。さあ、飛んで」
私は素直にその腕に飛び込んだ。それが一番正しいことのように思えたのだ。
普段の私なら、これくらい平気だ、と胸どころか手も借りなかっただろう。
「ありがとな」
レイに抱かれたまま顔を上げそう言うと、顔が間近だったのに照れたのか目を反らされた。
「別に」
私が堪らずケタケタ笑うと、抱かれたまま砂浜に運ばれた。

背丈は殆ど変わらないのに力は結構あるようだ。軽々と私を運ぶ。
「降ろせよ」
「降ろさない」
「なんでだよ？」
「なんでも」
「わけの分からんヤツだな」
私の言葉を無視し、砂浜へと歩く。バルコニーから見える灯りだけで、外に外灯らしきものはない。
この海がどんな色をしているのか分からない。
ただただ闇のような黒が広がっているだけだ。時折何かに反射したように光る。波の音だけが耳に入る。波に呑まれてしまうような気がして、レイにしがみ付いた。
「どうかした？」
「なんでもない。なあ、レイ。ここの海は青いか？　澄んでるのか？」
私が見たことのある海は濁っていた。たまたま台風が近付いていたせいで、お世辞にも美しいと言えるものではなかった。
「青いよ。澄んでいて美しい海だよ」
「降ろして、レイ」
今度は降ろしてくれた。
煩わしいハイヒールを脱ぎ捨てた。
「レイ。ちょっと向こう向きな」
「え？」
「覗くつもりか？」
スカートを持ち上げようとする私を見て、レイは慌てて後ろを向いた。
スカートを持ち上げストッキングを脱ぐと幾分楽になった。ストッキングは苦手なのだ。
「レイ。ほら、やるよ。特別にオカズにしてもいいぞ？」
脱ぎたてでまだ温もりの残るストッキングをレイの目の前に突き

付けそう言った。
　反射的にストッキングを受け取ったレイは、すぐさま顔が赤くなった。
「オカズって？」
「分からないなら別にいい。とにかく私からの誕生日プレゼントな」
　そんなもの、変態でないのなら嬉しくも何ともないものでしかない。だが、レイは心なしか嬉しそうだ。
　まさか、こんな無邪気な顔して変態とは思わなかった。
　頬を染めたまま私が身につけていたストッキングを見つめているレイを無視し、スカートを上げて海水の中に足を入れた。
「はぁ、気持ちいいな。おい、レイ。いつまでそれとにらめっこするつもりだよ。あんたも入れば？」
「え、ああ」
　丁寧にストッキングを畳んでポケットに押し込むと、靴と靴下を脱ぎ、裾を捲ってこちらに走ってきた。
「別にあんたはまだ若いんだから、裸で泳いでもいいんだぞ？」
「そんな恥ずかしいことしないよ。それに亜美殿だって大して歳は変わらないよね？」
　私が足で水を蹴り上げると、慌てて逃げていく。
「あんた１６だろ？　私はもう１９だぞ。この年代の３歳差は大きい」
「もう俺も成人したんだ。多少の年齢差は問題ない」
「問題？　なんの話だ？」
「俺と亜美殿が結婚をするのに問題はない。俺はあなたと共に生きたい。結婚して下さいっ」
「結婚っ？」
　どういう経緯でこんな流れになってしまったのだ。
　暗闇に慣れた目でレイの真意を確かめようとした。そんなもの、注意深く見なくても、レイの瞳からウソが一つも感じられないことは分かっていた。

「無理。ガキとは結婚しないし、私には夢があるからな」
「夢？」
「そう、夢だ。それを叶えるために今勉強している。結婚なんてしている時じゃないんだ。それにあんたのことなんてよく知らないしな。結婚ってのはよくお互いを知って、想い合った二人がするもんだぞ」
私はその夢を叶えるために専門学校に通っているのだ。
「亜美殿の夢を聞いても？」
「次に会ったときに教えてやるよ」
次に会うことなんてないだろうと思った。初めて会った少年に夢を語ることは、あまりに恥ずかしい。卑怯ではあるが、次という言葉を使うことにしたのだ。
「もし、次また会えたら」
「ああ、教える。結婚も考えてやってもいいぞ。あ、勘違いすんなよ？　考えるだけだからな」
「じゃあ、今から考えておいて。すぐにまた会えるから」
いやに自信有りげの態度に戸惑う。これは夢であるはずなのに。
「亜美殿。そろそろ戻ろう。ワットが気付くころだよ」
私をひょいと抱き上げるとバルコニーへ歩を進めた。ここの海を昼間に見れなかったことが心残りだ。
「レイは案外力持ちだな。重いだろ？」
「亜美殿は重くないよ。とても軽い。あんなに食べていたのに何でこんなに軽いのか不思議だ」
「そりゃ、食ったら出すもん出してるからな」
「ああ」
レイが肩を揺らして笑っている。女がこんなことを言っているのに眉を潜めすらしない。
「あんた変わってるよ。私みたいな下品な女にわざわざプロポーズするなんてな」
レイはまだ笑っている。やっぱりからかってるんだろう。

悔しかったので、レイをどうにか動揺させてやりたかった。笑いなんて引っ込めさせてやりたかった。

私は、笑いが零れるその口を唇で塞いだ。レイが驚くような、甘く濃厚なキスをしてやったのだ。

「参ったか？」

「……参った」

茫然と、だが頭の整理がついた途端真っ赤に染め上がった顔は、べらぼうに可愛かった。

可愛いイヌにするように、もう一度小さなキスをした。

第5話

「良かった。バレていないようだよ」
バルコニーに戻り、レイが私を下ろしそう言ったが、それに答えるように低い声が間近で聞こえた。
「バレてないとでもお思いですか？　レイ殿下がまさか亜美様と逢引きなさるとは思いませんでしたが」
「いけなかったかな？」
レイは平然とそう尋ねた。
「そうですね。一人で逃げ出さなかっただけ、よしとしましょうか」
「なんだ、レイ。逃亡癖でもあるのか？」
私の問いに答えたのは、ワットの方だった。
「レイ殿下は舞踏会がどうしてもお嫌いなようで、必ず途中で姿を暗ましてしまうのです」
その気持は分からなくもない。事実私もこうしてこの場から退屈しのぎに海を見に行ってしまったのだから。
「そうか。レイ、気が合いそうだな。私も舞踏会は嫌いだ」
「ホント？　じゃあ、俺と結婚してくれる？」
「それは無理だ」
「やはりレイ殿下は亜美様をお見初めになられたのですね？」
あらかじめ見越していたと言いたげなワットに私は眉を潜め、レイは決まり悪そうに苦笑いした。
「ワットはレイのことなら何でもお見通しなのか？」
「長年お側にいさせて頂いておりますので」
「まるで夫婦みたいだな」
そう呟いた私に、不満げにレイが何か呟いていたが、上手く聞き取れなかった。ワットには聞こえたのか、そうですね、と微笑みながら同意している。
「二人とも中にお入り下さい。主役が席を外すなどあってはならな

いことです。陛下に挨拶はされたのですか？」
　ワットのレイへの説教が続く。レイは慣れているのか、ワットの機嫌を損ねない程度に相槌を打っている。説教内容がレイの脳に吸収されているのかは甚だ疑問が残る。
「亜美殿。俺の両親に会ってくれる？」
「会うのは構わないけど、結婚の挨拶じゃないよな？」
「さすがに同意を得ていないのに、強引に話を進めようとは思ってないよ」
　レイがそういうタイプじゃないことは、この短い時間で分かっているつもりだ。私が嫌がることをするような非道な人間じゃない。

　レイの母親は一言で表せば、柔らかい、だ。
　挨拶する間もなく抱き締められ、立派な胸に押し付けられた。柔らかくて気持ちいいのだが、強く押し付けられたせいで、呼吸困難になるところだった。レイとレイの父親に助けてもらわなければ危ういところだったのだ。
　解放された私が漸くまともに挨拶をすると、柔らかい笑顔を返された。
「可愛いらしい方。この方が私の娘になってくれるの？」
「いえ、母上――」
「嬉しいわ。私のことは本当の母と思ってくれる？」
「だから、母上――」
　どうやら暴走癖があるようで、こうと思い込んだら周りの話は聞かないタイプのようだ。
　少し私のハハに似ているような気がした。
「悪いけど、レイと結婚するつもりはないぞ。それにあんたも私みたいな礼儀も知らない奴はイヤだろ？」
「まあ、レイったら、まだ心を射止めていないのっ。亜美さん。私も昔はあなたと同じような話し方をしていたのよ？　気性も荒かったし。礼儀が正しい人がいい人とは言えないでしょう？　私は一目

であなたが好きだと思ったのよ？　これはレイに頑張って貰わなければね」

初めはレイに語り掛け、私に矛先が向いたかと思えば、またレイに向かう。

ころころと視線が行ったり来たり、身ぶり手ぶりで一生懸命話す姿は可愛らしい。年齢不詳のレイの母親は、私と二人で並んだら姉妹に見られるかもしれない。

「こらこらあまり無理強いしてはいけないよ。娘さんを手に入れたければ、レイが努力するしかないんだ。まあ、私は自分の息子を信じているんだがね」

「私だってレイを信じてるわ。きっと私たちの望む未来を見せてくれるに違いないわ」

レイに掛けられるプレッシャーは容赦なく振り掛けられているようだ。

それをレイは重荷に思っている風もなく、意欲に燃えているように見える。

プレッシャーを掛けられているのは、レイではなく私ではないのか。

あまりその辺は考えなくてもいいだろう。ここもここにいる人々も、今置かれている状況も全て朝が来たら覚める夢でしかないのだから。

あまりにリアルなこの夢は、いつしか終わるのだから。

レイの両親と別れたあと、レイがあまりにしつこく誘うものだから、渋々ダンスの誘いを受けた。

ダンスを踊った経験など皆無な私には無謀なその申し出を受ける気になったのは、夢なら踊れないダンスも都合良くこなせるんじゃないかと思ったからだ。

蓋を開けてみれば、そんな甘い話はいくら夢でもそうそうないようで、私は常にレイの足を踏むことになった。

私が一回踏む毎に短く呻くが、何となく嬉しそうに笑うレイは、そうとうMなんだとにらんでいる。
「まともに踊れないって言ったろ？」
「踊れなくても、踏まれてもいい。亜美殿と踊ることに意義があるんだ」
「そんなもんか？」
「そんなものだよ」
これはもしかしたら、シンデレラの世界を夢に見ているんじゃないかとふいに思った。
舞踏会で王子と踊って、王子に見初められ、12時の鐘で夢は醒めるんだ。夢は醒めてしまったけれど、王子はシンデレラを捜し出す。
夢が醒めても、レイは私を捜し出してくれるだろうか。イヤ、そんなことがあるはずがない。これはお伽噺ではないのだ。現実に現れて求婚されても困るだけだ。
「何考えてる？」
「イヤ。何も」
もうすぐダンスが終わり、舞踏会も終わる。
お祭りが終わった後の焦燥感に似た気持ちに私は驚いていた。全てが終わることを悲しいと思ってしまうなんて。
そう思うほどに、私はレイを気に入っているのだ。一度きりでさようならはイヤだと思うほどに。

「亜美殿。しばしの間お別れだ。必ずまた会うから」
ドレスは脱ぎ、着ていた服に着替えていた。
「会いたきゃ、会いに来い」
「そうする」
社交辞令でも当たり前のように断言するレイに嬉しさが込み上げる。
「またな」

「また」
ワットの後についていく。壁に隠されていた秘密の通路を暫く歩くと窓がある。
「さあ、亜美様。ここをくぐればあなたのお部屋です」
この窓が私の部屋のブラウン管テレビと繋がっているのだろう。
私も貞子のように這い出なければならないのだ。
「ここでいいよ、ワット。とんだ経験だったけど、案外楽しかったぞ」
窓を通り、テレビから這い出て向こう側を見たが、ブラウン管テレビはもうただのテレビでしかなかった。
夢は終わったのだ。

第6話

あの夜の出来事が夢だったと思えずにいた。
レイに触れた唇を、触れた手の温もりをありありと思い出すことが出来るのだ。まだその温もりを体が覚えていた。それはもう生々しく。
夢にしてはあまりにリアルだったのだ。
もし、夢でないのならあれはなんだったと言うのだろう。
現実では理解できない世界がこの世に実存するのなら、私はまたあの二人に会えるだろう。
私はそれを望んでいるのだろうか。
あの夜から一週間が過ぎたが、私の生活は滞りなく過ぎていった。
「亜美。最近おかしいね？　何かあった？」
話し掛けられているのは分かっているが、鉛筆を置くことが出来なかった。
確かに今の私はおかしいのかもしれない。元々作品製作には意欲的だが、一心不乱に描き続ける姿は他人が見れば異様なものかもしれない。
「亜美。聞こえてるんでしょ？」
少し怒気を含んだ声に漸く顔を上げた。
これ以上彼女を怒らすのは得策でないと、長年の付き合いで熟知している。
「真希」
幼なじみの彼女が私を見て、盛大なため息を吐いた。
「ここで話せないなら、今夜遊びに行ってもいい？」
「いいけど、部屋汚いぞ？」
「想像つくから別に驚かないよ」
「そうか」

その夜、予告通り真希は姿を現わした。
チャイムを鳴らしても一向に出ないことに業を煮やし、勝手に入って来た真希は、部屋に籠もり切りの私を叱り付けた。
「チャイムを押しても出て来ない。不用心にも鍵はかけてない。泥棒や強姦魔が入って来たらどうするつもりなのよ。もうっ、部屋に籠もり切りでご飯は食べたの？」
真希は私のハハよりもよっぽど母らしい気がする。
「鍵をかけ忘れてたか？　今度から気をつける。ご飯は、食べてない」
「そんなことだろうと思って食材は買って来たから、亜美は食事作って」
「5分だけ待ってくれ。5分で出来る」
「亜美っ」
「ホントに5分だけだ。そしたら、ちゃんと話す。だから、今は描かせてくれ」
真希は大きく息を吐くと、何も言わず階下に降りていったようだ。
私はもうまもなく完成するそれに再び取り掛かった。そして、全てを描き上げた私は、それらを重ねて持ち、階下へ降りた。
テレビを見ながら笑い転げている真希が足音に気付いて振り仰いだ。
「終わったの？　私、お腹空いたんだけど」
「今から作る。これ読んでくれるか？」
そう言って今まで描いていたそれを手渡した。
頷いた真希がページを捲るのを見届けてから台所へ向かった。
真希は料理が出来ない。イヤ、やれば出来るだろうが、自宅にいて作ってくれる人がいるのでやらないのだ。
私には父がいない。幼い頃に離婚したと聞いている。物心がつく前の話なので、父の顔は覚えていない。離婚後会うこともなかった。
我が家の大黒柱のハハは、有名編集社の有名雑誌の編集長を務めているため、酷く多忙だ。締め切り前は会社に泊まることは珍しく

ないし、そうでなくても帰りが遅い。
私は必然的に料理を覚えた。料理をすることは嫌いじゃない。ハハが帰って来て食べると思えば、張り合いもある。
今日もハハは遅いだろう。
私の料理が出来るのと、真希が読み終わるのはほぼ同時だった。
何かをいいたげに私を窺う真希を一瞥して言った。
「先にご飯を食べるぞ」
さっさと席に着いて真希を待つ。
他愛ないお喋りをしながら、食事をした。敢えて核心部を触れないようにお互いがそうしていたように思う。
私は食事をしながら、レイのことを考えていた。レイは、現実に存在する人なのだろうか。
レイはもう一度会えると言っていたが、本当だろうか。
色々と考えていたからだろうか、ご飯の味があまりしない。今、口の中に何が入っているのか分からない。今なら嫌いなトマトも食べられるかもしれない。
食事のあとは真希が食器を洗ってくれる。その間に私は食後の飲み物を用意するのだ。私は紅茶を真希にはコーヒーを。幼い頃は二人とも紅茶やコーヒーの味を知らなかったから、食後の飲み物はジュースだった。いつ頃からだろう。ジュースを飲まなくなったのは。真希がコーヒーをブラックで飲むようになったのは。私も真希も映画の女優が優雅に飲んでいる姿に憧れを持ってからだったと思う。私はイギリスの女優に憧れて、真希はハリウッド女優に憧れてのことだ。
それらをリビングに運ぶと、後から真希も現れた。
「ありがとな、真希」
「いつも食べさせて貰ってるんだから当然。……それで？　これは一体なんなの？　これは絵本というより童話に近いんじゃない？　珍しい。方向転換？」
「そういうんじゃない。その話は私が実際に経験したことだ。それ

が現実なのか、夢なのか分からないけどな。忘れちゃいけない気がした。だから、こうして描いたんだ」

まだ記憶は鮮明だ。目の前にレイやワットの顔を思い浮かべることが出来る。だが、いつその記憶が薄れるとも消えるとも分からない。

私は二人を、厳密に言えばレイを覚えていなくてはいけないような気がしていた。云わば使命感のようなものが、私を突き動かしていたと思ってもいい。

「夢じゃないの？」

「夢かもしれない。でも、夢じゃなかったのかもしれない。夢じゃなかったなら、あいつらはあの城は、あの舞踏会はなんだったんだ？　こんな馬鹿げたことが現実なわけがない。だけど、どうしても夢とは思えないんだ」

もう一度レイと会いたいと思うのはどうしてだろうか。

会ったとして、再びプロポーズされたとしても私が首を縦に振ることはないだろう。レイに対して恋情は今のところない。ただ、レイの無邪気な笑顔に人として惹かれているのは確かなのだ。

「信じられないだろ？　私も信じられないからな。無理もない」

真希はそれを見ながら深く深く考え込んでしまった。

真希が信じるかどうかは本人の自由だ。私がどう信じてくれと言ったところで、私自身信じることが出来ないものを信じさせようとしても無理があるのだ。

「俺が実物じゃないなんて、亜美殿は酷いことを言うんだね？　俺はちゃんとここにいるよ」

その声は唐突にあらわれ、私を支配した。

第7話

「俺はここにいるよ」
その声を聞いた私が初めにしたことと言ったら、真希の反応を窺うということだった。
私のとなりに座っていた真希は私など見ておらず、私の後方を見上げていた。
口をぽかりと開けた真希が見ている先に彼はいるのだ。
真希が彼を目にしているということは、私が描いたあれは夢ではなかったということだ。
「亜美殿？」
私を呼ぶ声が私の真後ろから降りかかる。
少しだけ振り向くのが怖い気がした。
それでも体は私の思いなどお構いなしで、体を捻る。
そこにいるのは、まさしく片時も忘れることが出来なかったレイだ。
その少し後方にワットが畏まって立っている。
「レイ。現実なのか？　夢じゃないのか？」
「夢じゃない。俺は本物だよ」
相変わらずの無邪気な笑顔が私を安心させる。
ああ、本物なのだ。
そう、無条件に思わせてしまう力をその笑顔は持っているようだ。
「夢じゃなかったのか。じゃあ、私はあの不可思議な出来事を受け入れないとならないんだな」
一度、信じると決めてしまえば、それはあまり難しいことでもない。どちらか判断できない時のほうが受け入れ難かった。どっちつかずだからこそ、疑ってしまったのかもしれない。
「で、あんた達はやっぱりあそこから入って来たのか？」
「ええ、前回と同じように」

直立不動で、一見マネキンにさえ見えたワットが口を開いたことに小さく驚いた。気配すら消していたように思える。それこそ本当のマネキンのように。

「それは相変わらずホラーだな」

真希は私と二人を交互に見ていた。

私なんかより、真希が現実を飲み込むほうが困難のようだ。

「取り敢えず二人とも座れば？　飲み物はコーヒーでいいか？」

「コーヒーを飲むのは初めてだが、それを頂くよ」

二人がソファに腰を沈めるのを見届けて、台所へ入った。

コーヒーは真希のためにドリップしてあったので、カップに入れるだけだ。

ささっと用意して、リビングに急いだ。初対面の真希に、二人を押し付けるのは気の毒だ。

「そうか、真希殿は亜美殿の友人か」

「友人じゃないわ。親友よ」

私の心配は無用のようだ。先ほどあんなに唖然としていた真希がなんだってこの短時間でこんなに馴染めるのだ。その人懐っこさは侮れない。

「自己紹介は済んだのか？」

「うん。済んだ」

真希はこの現状を受け止めたのだろうか。甚だ信じられない事態だが、柔軟性のある真希のなせるわざなのかもしれない。

「あんたたち、本当に来たんだな」

真希の隣に腰掛けて、二人を眺めてしみじみと呟いた。

「亜美殿。これからよろしく。暫くここに住むことになったんだ」

「ここってどこ？」

「ここ」

「どこ？」

「ここだよ」

にっこりと微笑んで床を指さす。

「ここってまさか、家じゃないよな？」
「そのまさかの亜美殿の家だよ」
「いやいやいや、それは無理だろう。ハハが反対するに決まっているぞ」
私だけの家ではない。ハハが一緒に暮らしているのだ。
ハハが高給取りなので、この家は二人しか住んでいない割に広い。将来私の旦那様がここに一緒に住んでくれるのをみこして広い一軒家を建てたのだと、嬉しそうに語るハハの姿が目に浮かぶ。
レイがここに住むことは物理的に言えば可能だろう。だが、女二人暮らし――場合によっては私一人だ――の家に男を住まわすのは、道徳的に如何なものか。
「久美殿には了解は得ております」
「へぇ、そうか」
ワットの淡々とした物言いに思わず頷いてしまったが、私は恐ろしいものでも見るような目で二人を見た。
「イヤイヤ、なんであんた達が私のハハを知ってんだ」
「先日、御挨拶に伺いまして、ご説明させて頂きました。久美殿は快く私とレイ殿下を受け入れて下さったのです」
「あんたも住むんかいっ」
「ええ、勿論」
しれっと当然のように頷き、コーヒーを一口含む。
「ああ、これはとても美味ですね」
こいつのこういうところを、はったおしてやりたいと思うのは決して私だけではない筈だ。決して私が乱暴者だからではないはず。
「今の話は本当なのか？」
「本当だよ」
無邪気な笑顔が眩しすぎる。
邪気のない笑顔で答えられると、男が二人もこの家にいて、私の身が危険ではないかなどと疑っていた自分を責めたくなってくる。
すまん、レイ。あんたはそんなことはしない……はず。

「あんたたちが本物であり、ここに住むってことになるのなら、私は知っておくべきなのかな？　あんたたちのこと」

あやふやのままにしていたのは、あの世界が夢だと思っていたからだ。

あの世界が事実あるのだとしたら、それを聞かなければこの先私はもやもやとしたものを抱える羽目になる。

きちんと聞いておきたい。

「俺の名は、レイ・オルブライト。オルブライト王国の王子だ。あの世界は、この世界とは異なる空間に存在しているんだ。あの日、出席していたご令嬢の約半分は俺の世界とは異なる世界から招いた客人だよ。亜美殿もその一人だった。あそこにいたご令嬢は、皆俺の婚約者候補だったんだ。勿論亜美殿も婚約者候補の一人。王族は皆、１６歳の誕生日の日に舞踏会を開き、婚約者も選ばなければならない。俺の好みや相性を吟味して選ばれたご令嬢方の中から。そして、その中で俺が見染めたのが亜美殿だよ。俺は亜美殿の心を手に入れるためにここに来た。父上も母上も気持ち良く送り出してくれたんだ。亜美殿が俺の伴侶になると頷いてくれるまで、ここにいるつもりなのでよろしく」

「私は断った筈だぞ」

異世界の王子様に求婚された。目で見てしまったものを信じられないと突き放すことは出来ない。だから、それは受け入れる。あの出来事があってから、大分経っているのが功を奏したのか、受け入れる準備は出来ていた。

勿論申し出を受けるつもりはない。私は日本で生きている。日本で生涯を全うする予定でいる。決してここを離れるつもりはない。

「知ってるよ。でも、俺は亜美殿じゃないとダメなんだ」

「ここにいたきゃ勝手にしろ。でも、私はあんたを好きになんかならないぞ」

第8話

なぜこんなことに……。

私が一人頭を抱えたところで、何一つ現状は変わらない。

何も聞こえないふりで、何も見なかったふりで、自身の課題だけを睨み付ける。

だが、無慈悲な彼は私のそんな気持ちなど察することもなく、捕まっていた同級生達を上手にいなし、尻尾を振ってこちらに走ってくる。

「亜美っ。会いに来たよ」

「レイ。ここがどこだか分かっているのか？」

「勿論。亜美が夢を叶えるために必要なことを学ぶところだよね」

「そう、学校だ。学校に部外者は立ち入り禁止だったと思うんだけど、警備員に止められなかったのか？」

なぜここにいる？

満面の笑みをして、当然のように隣りに座り、私を覗き込んでいるレイはどうしてこんなに幸せそうなんだろう。

「通してくれたよ。亜美の先生にも許可を貰ったんだ。いつでも来ていいって」

なぜそんなことがまかり通るのだ。

常識的じゃない。先生は、そんなことを容易く許可するような人ではないはずだ。

「何かしたのか？」

「何もしてないよ。ただ、事情を話したら許してくれただけ」

一体どんな説明をすれば、年間パスポートが手に入るのか。

訝しげに見やる私を、嬉しそうに微笑み、首を傾げている。

ああ、耳が見える。頭を撫でてあげたくなる。

これは何かの罠なのか。

「納得できないが、先生が許可したのならいいんだろうな。でも、

邪魔だけはするなよ？」
「分かってるよ。大丈夫」
ついに我慢できなくなって、頭を撫でてしまった。すぐに後悔したが、目を細めて気持ちよさそうにしているレイを見てしまったら、諦める他なかった。
「ねぇ、亜美。その子、知り合いなの？　もしかして彼氏？」
同じ学科ではあるが、あまり交流のない、名前も知らない女の子だ。
そもそも名前で呼ばれるほど、親しくはないはずだ。
レイに興味があるから寄ってきたのだろう。その目的は清々しいほどに明確だ。
「あんたにはそう見えるのか？」
「見えなくもないかな？」
廻りくどい言い回しに眉を潜めた。
「俺は亜美の婚約者だよ」
「おいっ」
何を勝手に宣言していやがる。
教室にどよめきが走った。聞いていないと思っていた同級生たちは、こっそりと聞き耳を立てていたのだ。それだけ、この教室にレイは異様な存在だったのだ。恐らく彼女たちの中では良い意味で。
「勝手なことを言うな。私は断っただろうが」
「大丈夫。亜美を絶対振り向かせるから。亜美に悪い虫がつかないように宣言しておかないとね」
宣言をしたところで、私のような女に悪い虫がつくとは思えない。取り越し苦労だ。
「そんなのいるわけないだろ。宣言する必要も意味もない」
「そんなことない」
むぅっと拗ねたようなレイの顔を見ていると、それ以上は言えなくなる。
「今のところ彼氏ではないってことね？」

あんた、まだいたのか。
つい口に出しそうになって慌て口を接ぐんだ。
「そういうことだな」
「ねぇ、紹介してくれない？」
「彼のことが知りたいんなら、自分から名乗ればいい。わざわざ紹介するまでもないだろ、目の前にいるんだから」
「そ、それもそうね」
私の冷たい切り返しにめげることなく、彼女はレイに自己紹介し始めた。あまり興味がないので、聞いた途端に名前を忘れた。
レイがにっこりと名を名乗っている。
彼女の顔をこっそりと窺う。
どうやら恋に火が点いてしまったらしい。頬をほんのりと染めて、うっとりとレイを見ている。
どうでもいい。勝手にやってくれ。私を巻き込まないなら大いに結構。
これでレイが私じゃない誰かに興味を持ってくれればいい。そうすれば私はお役御免なのだ。
先生が来て授業が始まっても、レイは教室に居座った。
私の隣で、真剣に講義を聞いている私を飽きることなく見つめている。気にしないようにしていても、間近で見つめられると気になって仕方がない。
気にしたら負けだっ。
意地になった私は、講義中一度もレイの方を見なかった。
「レイ。帰らないのか？」
講義が終わるやいなや、レイにそう言った。
「俺は亜美の真剣な表情とか見ていたいからここにいるよ」
「……講義中にずっと見られてると、集中出来ないんだけど」
「でも、俺少しでも亜美と一緒にいたいんだ」
レイのこういう表情は演技なんじゃないかと疑いたくなる。
尻尾が垂れ下がったレイを突き放すことが出来るほどに冷たい人

間にはなりきれなかった。
「いてもいいけど、私をあんまり見るな」
「えぇっ」
「見るな」
「分かった。控えるようにするよ」
「ワット。あんたもだよ。待つならレイの隣に座ればいいだろ」
ワットは授業参観に来た保護者のように教室に後ろに立っていた。
気のせいではないはずだ。ワットの視線が後頭部を焼き付けようとしているかのようだった。
「私などが座るなどおこがましい」
「いいから座れ」
どすのきいた低い声を絞りだすとゆっくりとレイの隣に座った。
これで少しは集中出来るだろう。
「亜美。今日、帰り買い物付き合ってくれないか……って、知り合いか？」
いつものように教室に飛び込んできたもう一人の幼馴染が、私の隣りに座る二人を見て訪ねて来た。
「まあ、ちょっとな」
「へぇ、こんなおっとこ前な知り合いが俺以外にもいたんだな？」
「太一を男前だと認識したことはないぞ？」
「酷いな、それ」
男前と豪語しているこの太一とは、真希よりも長い付き合いだ。
産まれる前から母同士に交流があり、産まれたあとも何かと行動を共にしていた。云わば兄弟のような存在といえるだろう。
ここで言い訳がましく言わせてもらえば、私の言葉遣いが乱暴になってしまったのは、太一と長くいたせいなのだ。決して責任転嫁ではない。太一があんなことを言い出さなければ、私はこうはなっていないはずだ。
「で、今日は二人がいるから無理そうか？」
ちらりとレイに視線を移し、怯んだ。今にも泣き出しそうな迷子

の子犬のような目をして私を見ているのだ。
「あっっと、こいつらも一緒でいいか？」
「いいぞ」
「やった。亜美っ、ありがとう」
「うわっ、離れろっ」
レイに抱き付かれて、私はたじたじだ。
その様子を、太一は驚いたように、ワットは無表情で見ていた。

第9話

見られている気がする。
それは私の気のせいではないはずだ。
振り返れば恐らく視線はそらされるのだろう。私が敢えて振り向かないのは、その視線が一つだけではないからだ。
「あんたら派手な顔しすぎだろ。無駄に目立ってる。なあ、先に帰ってもいいか？」
私の前を歩くのは、レイとワット、そして太一だ。私の隣には真希がいる。
前の三人も真希も、人から注目されるだけの容姿をしている。
さっきから鬱陶しいほどの視線にうんざりしていた。芸能人でもないのになんでこんなに注目されなければならないのか。しかも、おまけで。
「確かに見られてるかもしんないけど、ほとんどの視線はレイとお前だろ」
太一がそう言った。
学校から出る頃にはもう既に、太一はレイとワットと馴染んでいた。
「何？　私はそんなに美しいのか？」
おちゃらけた声でそう言った。
「お前は美しいよ」
太一がいつにもまして真面目に褒めてくるので戸惑いを感じた。
だが、それが私を引き留めるために煽てているのだと分からないほどおバカではないのだ。
「褒めたってなんも奢ってやらないし、私は今すぐ帰るぞ」
「まあ、待てよ。母さんの誕生日プレゼント、一緒に選んで欲しいんだ」
「そうか、忘れてたぞっ。私も買わないとな」

「じゃあ、折半しようぜ」
「おお、いいな」
太一は多分それが目的だったんだろう。お金がないから二人で買って贈ろうという。
太一の母珠美さんには、幼い頃からお世話になっている。私に料理を教えてくれたのは珠美さんだったし、私が恋愛相談したのも彼女だった。
ハハが限りなく父親に近い存在だとするのなら、珠美さんは母親のような存在だ。
「珠美さんのバースデープレゼントっていうなら行かないわけにはいかないな」
視線は気になるが、仕方ないと割り切るしかなさそうだ。
お洒落な雑貨屋さんを真希に教えて貰い、早速見て回る。
可愛い小物や雑貨が大好きな珠美さんが来たら目を輝かせそうな店内には、見ているだけでも楽しめるものが並んでいた。
「アロマキャンドルなんかがいいんじゃないか？　寝室で焚いたらムードがあって盛り上がるぞ」
「親のそういうのは想像したくないな」
うちには父親がいないので、分からないところだが、そんなものなんだろうか。ハハは、わりとオープンになんでも話すので抵抗はないのだが。
「そんなもんか？」
「そんなもんだ」
「そうか。じゃあ、もっと見てみようぜ」
初めはぞろぞろと団体様で動いていたが、やがて散り散りになっていった。
「亜美。ここには面白いものが沢山あるんだな？」
気付けば隣に、レイが立っていた。そのまた隣にワットがいるかと思ったが、その姿は見当たらなかった。
「ワットはどうした？」

「うん？　その辺で見てるよ」
「そうか。レイは何か気に入ったものがあったか？　あんたが日本に来た記念になにか買ってやるぞ？」
　レイはハハから日本円を持たされていた。だから、買おうと思えば自分で買えるのだ。けれど、私からなにかをあげたいと思ったのだ。
「俺、持ってるよ」
「私が贈りたいんだよ」
　レイが少し考えるように頭を捻った。
　王族であるレイは贈り物を貰い慣れているだろう。だが、女性から男性に贈り物をする習慣がないのかもしれない。
　レイが考え込んでいるのを見て、そんなことを考えた。
「俺、亜美や久美さんが使っているようなカップが欲しいんだ。同じ柄のもの」
　何が欲しいか考えていただけだったようだ。
「ああ、お揃いのマグカップな？」
「俺だけ二人と違う」
　レイは客用のマグカップを使っている。
　それを寂しいと、羨ましいと思っていた、ということなのだろう。
「あれはハハが買ってきたやつだからどこに売っているか分からないな」
「じゃあ、亜美と同じのが欲しい」
　駄々っ子かと突っ込みたい。だが、その様子が可愛くて、頭をよしよしと撫で繰り回したいとも思った。
「仕方ないな。ハハが拗ねるから三人一緒な？　で、どれがいいんだ？」
　ハハも大人のくせに子供っぽいところがある。永遠の十代を地で言っているような人だ。
「これなんかどう？」
　レイが選んだのは、シンプル過ぎず、適度に可愛くて、使いやす

そうな、文句のつけどころがないものだった。しかも、色も多く揃っている。

ハハが好きな色はピンク、私が好きなのはオレンジ、レイはグリーンを選んだ。

「うん。いいな。これにしよう」

このマグカップがうちの食器棚に並ぶところや、食卓に並ぶところを思い浮べてにんまりとした。その光景はとても幸せなもののような気がした。

「いけない。ワットのを選び忘れた。仲間外れになるところだ。ワットが何色が好きか知ってるか?」

「これかな」

レイが持ち上げたマグカップを籠のなかに入れた。

ワットのカップはブルーだ。

「おい、亜美。今日の趣旨忘れてないか?」

籠のなかに並んでたたずんでいる4つのカップをにんまりと眺めていると、後ろからぬっと太一が現れた。

「おおっ、そうだった。珠美さんだっ。なんかいいの見つかったのか?」

「写真たてなんかどうだ?」

「いいな」

それはとてもいいプレゼントだと思った。

太一の父ちゃんは写真を撮るのが好きだ。休みになると珠美さんと一緒に散歩しながら撮影して回っている。太一の家には写真が溢れているのだ。

「これなんてどうかと思ってさ」

太一が持ってきたのは大きなサイズの写真たて、というより額だった。

「あの写真を入れるのにいいんじゃないか?」

「お前もそう思うだろ?」

太一の父ちゃんが写真のコンテストに応募して賞を取った、珠美

さんを撮った写真だ。
太一の父ちゃんだけでなく、珠美さんも気に入っているその写真を大きく引き延ばして、飾って欲しい。
思い描いただけで、幸せになる光景だった。
「ねぇ、一つ聞いてもいい？　太一くんは亜美が好きなの？」
突然、レイが割って入ってきたと思えば、その質問は酷く突飛なものだった。
「何言ってんだ、レイ」
「亜美は黙って。俺は太一くんに聞いてるんだよ」
一体全体なんだってこんな吹っ飛んだ質問が出来るのだ。しかも、私を目の前にして。
「好きだ。ずっとずっと好きだ。レイ。亜美はお前には譲れない」

第１０話

告白なんてものは、面と向かってされるものと認識している。イヤ、していた。だのに、なんだってこんな事態になっているんだろう。

「好きだ。ずっとずっと好きだ。亜美はお前には譲れない」

私に伝える前に、なぜその言葉をレイに打ち明けているのだろうか。私という存在がここにいるというのに。

「俺だって諦めないよ」

「イヤイヤ、おいおい。なにあんたらは勝手にやっちゃってんだよ。私の存在忘れてないか？　太一、今の言葉は本当なのか？　不本意ながら私は告白されたことになるんだろうか？」

まるで私の存在など忘れていたかのように驚き、同時に私を見据える二人。

驚いているのはこちらの方だ。

「こ、こんな形で言うつもりはなかったんだ。でも、気持ちに嘘はないぞ」

店の中で打ち明けられて、私はどう対処すればいいのか。好奇心を孕んだ視線が、こちらに容赦なく降りかかるのを感じながら、私は答えなければならないのか。

「びっくりした、としか言いようがない。そもそもこんなところでする話じゃないだろ。場をわきまえろ。私はもう帰るぞ」

二人に引き止められる前にその場を後にし、マグカップの代金を素早く清算したあと、店を後にした。

真希には、店を出て、少し落ち着いてからメールを送った。

真希にどんな顔をして会えばいい？

私は知っていた。

真希が太一をもう長いこと想っていることを。

自分が太一に告白されたことよりも、真希のことが気に掛かった。

真希はあの二人の会話を聞いてしまっただろうか。
なぜよりによって私を。
何も悪くないはずの太一を責めたくなった。私という存在を責めたくなった。

家に帰ると、珍しくハハがいた。
「お帰り、亜美」
「今日は早いんだな？」
「そう。一段落ついたって感じ。それにしてもどうかした？　顔が変よ？」
「顔は元々変だ。ハハに似てな」
「イヤね、怒らないで。あなたは私に似て可愛いわよ。顔が変なのは本当よ。おかしな顔してどうしたの？　話して御覧なさい」
こういうとき、何故だかハハに逆らえないのが不思議だ。話さなければならない気にさせる。
「太一が……私を好きらしい」
「そんなの今に始まったことじゃないじゃない？」
「知ってたのか？」
顔色一つ変えず、ぺろりとそう言うハハに驚きを隠せない。
「知ってるもなにも見てれば分かるわよ。それで？」
当然と語るハハを見ていると、一瞬でも戸惑いを見せた自分が恥ずかしくなってくる。
「それでって？」
「それであなたの方はどうなの？　太一くんが好き？　それともレイくん？」
人の気も知らないで、面白そうに笑みを滲ませるハハをこの時ばかりは憎たらしいと思った。
「別に二人ともそんなんじゃない。そういうのはまだ私には無理だ」
「何が無理なの？」
ハハは編集者だからだろうか、相手の言葉を引き出すのが上手い。

「考えられないんだ。多分、そういう受け皿が今の私にはない。自分の夢のことしか考えられない」
「それなら正直にそう言うのね」
「うん」
それは分かっているのだが……。
「あなたがそんなに気掛かりなのは、真希ちゃんのことね？」
「そこまで分かるのか？」
「舐めてもらっちゃ困るわね」
ふふん、と鼻をならした。
「なるほど。年の功というやつか」
「お仕置きするわよ？」
「面倒臭いからイヤだな」
ハハのお仕置きは、私の弱点を鋭くついてくる。
例えば、子供の頃なんかは私が何よりも大好きなお菓子を目の前で美味しそうに食べてみせたり、私が苦手な男子に私からと偽ってラブレターを出したり――これは誤解を解くのに苦労した――、５分おきに携帯を鳴らしてみたりとそんなものだ。地味な悪戯とも嫌がらせともとられるハハのお仕置きを私は幼い頃は特に恐れていた感がある。今では、面倒なので避けたいと言ったところだ。
「まあ、今回は見逃してあげるわ。真希ちゃんのことは、あなたが気にしたってどうしようもないことよ。例えば、自分の立場で考えてごらんなさいよ。あなたが真希ちゃんだったらあなたに気を使われて嬉しい？　よけい惨めな気分になるんじゃない？」
「確かにそうだな」
「何も知らない。っていつもと同じ態度でいるのが一番なのよ」
「ところで、なんでそんなに楽しそうなんだ？」
真面目な顔で助言しようとしているのだろうが、口元から笑みが漏れ出ている。
「だって、青春って私の大好物なんだもの。いいわよね、青春っ。悩んで、悔やんで、泣いて、笑って、苦労して。今しか出来ない貴

重な時期を今生きているのよ」
私には全く実感のわかないそのハハの言葉。あと何年か、何十年かしたら、同じような想いを抱くようになるんだろうか。
「よく分かんない」
「いいのよ。精一杯生きていれば、おのずと分かる時が来るんだから」
「そういうもんか？」
「そういうもんよ。ああ、今日は気分がいいから私が夕飯を作るわ。亜美、何が食べたい？」
「そうだな、オムライス」
「あなたは昔からオムライスが好きね。よし、分かった。とびきりの奴を作ってあげるわ」
料理下手なハハの唯一得意なオムライス。そのオムライスは、私にとって特別なメニューだった。何か特別なこと、例えば誕生日とか、学校で賞を取ったとか、私に初恋が訪れたとか、そんなときは決まってハハのオムライスなのだ。
「あっ、そうだ。ほら、これ。新しいマグカップ」
私は包装されたマグカップをテーブルの上に一つずつ乗せていく。
「これがハハのだろ。これが私。これがレイので、最後がワット。レイが選んだんだぞ」
「可愛いわね。何だか家族が増えたみたいで嬉しいわ」
嬉しそうにそれらを見て微笑むハハを見ていたら、ずっと疑問に思っていたことが口を吐いて出た。
「なんで、あの二人をここに置くことを許したんだ？」
「ワットくんは私の知り合いにとてもよく似ていたのよ。ついオーケーしてしまったわ。それに、私これでも人を見る目には長けているのよ。一目で彼らがいい子だって分かったもの」
知り合いに似ていたからと言って、ワットはハハの知り合いではないのだ。不用心にもほどがあるというものだ。
「ただいま」

レイの声が玄関から聞こえたことで、ハハとの話は強制的に終了してしまった。

第11話

緊張するとお腹が痛くなる。昔からそうだ。
お腹がしくしく痛むのは、私が今、緊張を強いられている証拠だ。
11月に入り、朝晩はかなり冷え込むようになった。唇がふるふると震えているのは、寒さのせいか、それともやはり緊張のせいか。
「寒いのか？」
気遣わしげに掛けられた声に、申し訳なさが込み上げてくる。
「平気だ。もっと場所を選ぶべきだったな？」
「俺は平気だよ」
晩秋の夕方はもう既に真っ暗だ。曇り空だったこともあり、暗くなる速度が早い。
暗闇の中、等間隔にしつらえてある外灯だけが、足元を照らしている。
もうどのくらいこの広い公園の中を歩き回っているのだろう。この公園に足を踏み入れたときには、まだ日が沈んではいなかった。
「亜美、俺ちゃんと受け入れるからさ。どんな返事でも、聞きたい」
このまま歩き続けることに耐えかねた太一が、私を促した。
「話がある」と、太一を連れ出したのは私。私から話し始めなければならなかったのに、言い淀む私に、太一は優しく手を貸してくれた。恐らく話の内容も、そのあとに訪れる何かも知っているというのに。
「長いこと付き合わせてごめん。ちゃんと話さないとな。返事を、しようと思う。太一の気持ちは、びっくりしたけど、すごく嬉しかったぞ。だけど、太一も知ってるだろ？　私は自分の夢を追いかけることで精一杯なんだ。今は、恋愛関係は私には必要ない」
「もし、お前がその夢を見続けながら、誰かを好きになってくれたらいいって思うよ。お前は恋愛を否定するけど、好きな相手がいることでプラスになるってこともあるんだからな。……それが俺だっ

たらなおのこと良かったんだけどな」
「プラスにって太一は言うけど、マイナスにだってなるだろ？」
私がこれまで見てきた恋する女の子たちは、確かに楽しそうに嬉しそうにしていたが、それと同じくらい苦しそうに悲しそうにしていた。楽しいときにも悲しいときにも、周りが見えなくなっている彼女たちは、私から見れば普通の状態ではなかった。地に足がついていないように、ふわふわとしていた。
私は、そんな煩わしい状況にはなりたくない。
「亜美の夢に、そういう人生経験みたいなものも必要なんじゃないか？　薄っぺらい人間が何を作っても、人の心を動かすようなものは出来ないぞ。別に俺はそれを強制しているわけじゃないんだ。ただ、お前にそういう感情が芽生えたとき、自分のそれを無慈悲に否定することだけはするな。その相手がどんなやつでも」
「そういう感情を私がいつか抱くことになるのかは分からないけど、そうなったときは、否定しないように努力する」
努力か、そう言って太一は笑った。ちょうど外灯と外灯の間の暗い場所で、太一がどんな顔で笑っていたのかを窺い知ることは出来なかった。
「お前はまだ何も知らないからな。人を好きになるとどんな気持ちになるのか、自分がどんな風になるのか。だから、俺はまだこの気持ちを消さない。お前に特別が現れるまでな」
いつかそんな特別が現れるのかは、私には途方も無いことのように思えた。
誰かに恋い焦がれる自分を上手く想像することが出来ない。
「婆さんになるまで出来なかったらどうすんだ？」
「その時は俺も生涯独身を貫いて、お前の傍で静かに暮らすさ」
「バカか。そんなことになったら、私が珠美さんに恨まれるぞ」
自分のせいで誰かの人生をふいにさせるのだけはしたくない。
だが、卑怯な私は、大事な存在である太一が離れてしまわないことを望んでいる。だから、強くその申し出を突っぱねられないのだ。

「母さんがそんなことでお前を恨むかよ」
恨まないだろう。珠美さんなら、私の傍に一生ついてあげなさい、なんて言ってしまうかもしれない。
「恨まないかもしれないな。でも、孫が出来なかったら泣くんじゃないか？」
「俺に子供ができなかったとしても、弥一と佐一が嫁さんもらえば大丈夫だろ」
弥一と佐一というのは太一の弟だ。
確かにあの二人は健全な恋愛をして、結婚、出産とスムーズに人生を全うするだろう。
私に太一を止めるすべはないのだろうか。
「他の人、好きになった方がいいんじゃないか？」
「俺もそう思うけどな。今のところ、お前以外を好きになる予定はない。ただ、別にお前だけに固執してるわけじゃないぞ。もし、お前以上に好きになれる女がいれば、遠慮なくそっちに行く。だから、お前はそんなに深く考えなくていいんだ」
太一はモテる。
小学校の頃はそうでもなかったが、中学に入ってぐんと背が伸び始めてから女の子から騒がれるようになった。
これからも恐らく太一の周りには女の子が寄ってくるだろう。その中で、太一が好きになる子が出てくるかもしれない。そうでなくても、身近に真希がいる。あまりに近くに居過ぎて気付かないだけで、真希を好きになるときが来るかもしれない。
これらは全て私の希望的観測に過ぎないけれど、ないわけではない。
あまり深く思い詰めなくてもいいのかもしれない。
「分かった。あんたの勝手にすればいい」
「ああ、そうする」
「あぁ、もう寒いっ。そろそろ帰ろうぜ。今日の夕飯どうしようかな。これから作るの面倒だな」

「だったら、うちに来ればいいだろ。母さんも弥一らも喜ぶぞ」
「そうか？　でも、レイとワットのご飯も作らないといけないしな。今日は遠慮しとくよ。鍋にでもすれば手間もかからない」
レイとワットという雛がピーピーと餌を求めて鳴いている姿を想像して吹き出した。
「どうした？」
「イヤ、なんでもない」
もう真っ暗だ。
家にいるレイとワットが腹を空かせてまっているかもしれない。
家に帰ると、真っ暗なことが当たり前だった私にとって、灯りのついた家はとても温かなものだった。そして、無邪気な笑顔で迎えてくれるレイをその時ばかりは愛おしいと思ってしまうのだ。
私は心なしか歩く速度を速めた。レイの笑顔が早く見たくなったのだ。無性に。
そんな私をこっそりと窺い、切ない苦笑を浮かべていた太一に気付くはずもなかった。

第12話

「亜美。いい加減にしなさいよ？」
一日の講義が無事終了して、フッと息を吐いて肩の力を抜いた。
そんな脱力した状態の時に、耳元で底冷えするような低い声が聞こえて、身体を強ばらせた。
「ま、真希」
振り返れば背後に仁王立ちした真希の姿があった。
真希とは、同じ学校とはいえ学科が違う。受ける講義がほぼ異なるので、丸一日会わないことだってある。それをいいことに、私は真希と会わずにいたわけだ。
「もう講義は終わったわね？」
「あ、ああ」
「じゃあ、ご同行願おうじゃないの。私は亜美と大事な話があるから、レイくんたちは先に帰っててくれる？」
「分かった」
私の隣に座っていたレイが、真希の冷気を感じたのか、すかさず返事をした。
いつものレイなら拗ねた表情の一つもするところであるが、ただならぬ物を察知したようだ。
レイのこめかみから冷や汗が零れてきそうだ。
「さあ、とっとと行きましょ、亜美」
私の腕を強引に掴むと、女とは思えない力で引き摺られる。
引き摺られていく私を、レイが笑顔で見送っている。
後で懲らしめてやる、と心中でどぐついた。

何か人に知られたくない話をするときや、静かなところでまったりとしたい時に真希とよく来る喫茶店に連れ込まれた私は、正面から真希に睨まれていた。

「怒ってるのか？」
「怒っているわよ」
「そ、そうか。ごめんな？」
やけに喉が渇くと、お冷やに手を伸ばした。
「何にたいして？」
「それは、真希が腹を立てていることに対してだな」
「さあ、問題です。私は何に腹を立てているのでしょう？」
凍るような微笑を見るのはこれが初めてではない。けれど、こんなにも恐ろしい笑顔はもう二度と見たくないと思った筈だったのに。
「私が、そのなんだ、真希を避けていたから」
「はい、正解っ。なんで避けるの？　私が太一を好きだから？　太一が亜美を好きだから？　亜美が太一の気持ちに応えられないから？　太一の気持ちを亜美が縛ってると亜美自身が思ってるから？」
「その全部だ」
真希は全てを言い当てていた。それは見事なまでに。
「全てが無駄よ。そんなことを考えるなんてナンセンスだわ。そのどれをも、亜美がどうすることも出来ないものよ。私が太一を好きだろうがなんだろうが、太一が見ている先には亜美がいる。それは曲げられない事実。太一がどんなに亜美を好きだろうが、亜美にその気がないのも事実。一々全部気にしていてもどうなるものでもないでしょう？　人の心はそう簡単には変えられない。だけど、いつどうなるかは分からない。それをそのまま受け入れるしかないのよ」
「真希は受け入れられるのか？」
「受け入れられるかじゃないの、受け入れなければならないのよ」
そうやってこれまで自分の気持ちと折り合いをつけて来たのだろうか。
「真希はいつから太一が好きなんだ？」
「私が転校してきたその日からよ」
それはもう、私たちが初めて会った日。
私と太一は元々ここで生まれ育ったわけだが、真希の場合は小学

校の2年生の頃にここへ引っ越してきたのだ。それからの付き合い。
私たちが初めて会った日、あの日も私は太一と一緒にいた。あの頃の私はどこからどう見ても男の子だっただろう。今でこそ「私」と称しているが、あの頃は「俺」と言っていた。太一と一緒になって男の子たちと果敢に遊んでいた私は、女の子ではなかった。
この町のことを何も知らない女の子のために、私たちが友達になろう、と慌ただしい引っ越し作業を覗きに行ったのだ。この町に来たことが不服なのか、しょんぼりとしている女の子に私たちは声をかけ、手を引いて遊びに誘った。
その後、娘が突然消えたと真希の両親が騒ぎ出すのだが、当の本人は私たちと楽しく遊んでいたのだ。
その日、真希は太一を好きになっていたのだ。小学校2年生の幼い私には、そんな感情を見抜く力はなかった。
「そんな前から好きだったんだな。私にはそんな感情は分からないけど、少し羨ましくも思うよ。誰かを真剣に思えるのとか、凄いな」
「私ね、もうすでに太一にはフラれてるの。結構前の話よ。それでも未だに諦めきれなくて、私も結構しつこいのね」
「告白してたのか？」
「そう。本当に随分前の話。中学校の時の話よ。クラスメイトに唆されて、もしかしたらオーケーして貰えるんじゃないかって気にさせられたのよ。まんまと告白して、まんまとフラれたわ。その直後は、クラスメイトを恨みたいと思ったものだけど、今では感謝しているかも。それがなかったら一生私はこの想いを胸にしまっていたと思うから。私もそろそろ新しい恋を探そうと思ってるんだ。いい加減同じ人を見るのも疲れたしね。ワットくんなんてどうかな？」
こんなに長く想い続けた人を、まだ近くにいるその存在を忘れることは出来るのだろうか。
「忘れるには次の恋を見つけるしかないって皆言ってるよな。見つけられそうか？　ワットはあんまりおススメしないぞ。あいつは無口だからな。まあ、真希がお喋りだから成立するかもしれないが。

別にレイでもいいんだぞ？」
「レイくんはいい。また私が辛い想いをすることになるし、友達の恋を邪魔したくないし」
「友達の恋って何だ？」
「勿論、亜美とレイくんの恋だけど？」
なんという妄想をしだしたんだ。
私がレイとどうこうなるなどとあるわけがないではないか。
「あるわけないだろ、そんなもの」
「でも、プロポーズされてるんでしょ？　それに、嫌がらずに傍にいさせるじゃない」
「それは、別に好きだから傍にいさせてるわけじゃなく、あいつがあまりに不憫だから仕方なく。私には夢の方が大事だ」
真希は呆れたと言いたがに大きな溜息をついた。
「夢だけを追いかけるのもいいけど、両立することも出来るんじゃない？　夢にとらわれ過ぎるのも賢明じゃない気がするけど」
「私はこれでいいんだ。恋愛なんて邪魔なだけだ」
話を遮るように、飲み物を流し込んだ。
夢だけ追いかけて何が悪い。恋愛なんてしなくたって人間は死にはしないのだ。
恋愛なんてクソくらいだっ。

第１２話（後書き）

いつも読んでいただいて有難うございます。
この作品ですが、誠に勝手ながら２０話まで投稿した後、しばらく休ませていただこうと思います。
色々思うところがありまして、少し寝かせたいと思いました。その間、違う作品を始める予定でいます。その後この作品をどうするかは、正直なところ分かりません。そのまま完結を待たずに消してしまうかもしれませんし、再び開始するかもしれません。
いつも読んでいただいている方々には申し訳なく思いますが、よろしくお願いします。

第１３話

ベランダ。
それは私のお気に入りの場所だ。うちのベランダは、バーベキューをすることも出来るほどのちょっとした広さがある。
いつも腰掛ける椅子に座り、夜気を肌に感じながら、スケッチブックに線を走らせていく。
部屋からの灯りと月の光で、十分に手元は明るい。
「亜美、寒くない？」
部屋から出てきたレイが、気遣わし気に問い掛けてくる。
「慣れてるから平気だ」
椅子を私の隣に寄せて、レイが私の手元を覗き込む。
「レイは寒くないのか？」
「俺も平気」
「そうか？　風邪引くなよ？」
「大丈夫。亜美はいつも絵を描いているね。それが夢？」
そういえば、レイにもう一度会えたら夢を教えると約束していた。
とくに教えることも、聞かれることもなかったので、そのままになっていた。
「そういえば、言ってなかったな。知りたいのか？」
「知りたい。教えてくれる？」
レイを見ると、真っ直ぐな瞳が私を見据えていた。どこまでも真っ直ぐな瞳に戸惑いを感じる。
「ちょっと待ってな」
その瞳から逃げるために席を立ったわけではない。
私の夢を語るためには、見せた方が早いと思ったのだ。
再びベランダに戻ると、レイに膝掛けとそれを渡した。
「あんた平気って言ってるくせに、寒そうだから」
「ありがとう。これは？」

「それは私が初めて作ったもの。処女作ってやつだな。私の夢はそれだよ」
「読んでもいい？」
「そのために持って来たんだ」
頷いて読み始める。
読み終わるまで大して時間はかからない。
くすぐったさを感じながら、月を見ていた。
今日は満月なのか。
どうりで明るかったわけだと、納得した。
月は私とレイを見守っているかのように、そこにいた。私が見上げても動じることもなく、堂々とした姿をさらしている。その月に吸い込まれてしまいそうな気がして、身体が急に浮き上がったような気さえしてきた。
「亜美？」
「あ、ああ」
月に魅入られていた。
「読んだよ。これは絵本だよね？　亜美の夢は、絵本を作る人なの？」
私の処女作を大事そうに撫でるレイを見て嬉しくなった。
「ああ、絵本作家になるのが私の夢だ。話も絵も全て自分で手掛ける、そういう絵本作家になりたいんだ」
「どうして、と聞いてもいい？」
「好きなんだ、絵本が。ただ単純に。幼い頃は、ぬいぐるみを貰うよりも絵本を貰うほうが嬉しかった。気に入った絵本は毎日毎日読んで、ぼろぼろにしていた。恩返しといったら大袈裟だけどな、幼い頃楽しませてもらったから、今度は私が書いた絵本で子供たちに楽しんでもらいたいんだ」
いつか、毎日読んでも飽きないくらいの絵本が作れたらいい。
それこそ、ベッドで抱いて寝るほどに。過去の私がそうだったように、誰かの宝物になれるようなものをいつか。

「いい夢だね」
「私には似合わない夢だけどな」
誰かに自分の夢をここまで詳細に語ったことはない。
太一や真希は私がどれだけ絵本が好きか知っているので、話す必要もなかった。私が絵本作家を目指すのは、自然な流れだったのだから。
「いつか、これが世に広まるかもしれないんだね」
「そうなればいいな」
「もし、亜美の絵本が形になったら、俺に読ませてくれる？」
「いいぞ。でも、あんたが読んで楽しいかは分からないぞ？　基本的に子供向けだからな」
「構わない。亜美の作品を一番に読めたらいいのに」
遠慮がちにそう言った。
何をそんな申し訳なさそうなんだろう。
「別にいいぞ。最初に読ませてやるよ。でも、ちゃんと感想を聞かせてくれよ。お世辞抜きの本音をな」
「本当？　ありがとう、嬉しいよ」
「何がそんな嬉しいんだ？」
「亜美の作品を一番に読めるなんて、俺が特別な存在みたいだよね。だから嬉しいんだ」
うかれているレイに、別に特別なわけではない、とは言えなかった。
ただ、感想を聞きたいから読ませるだけなのだ。他意はない。
「良かったな？」
「うん」
無邪気に頷いてみせるレイに苦笑しか向けられない。
「なあ、ずっと気になってたこと、聞いてもいいか？」
「え、なになに？　俺がどうして亜美を好きになったのか、とか？　それはね――」
「イヤ、それはいいや」

それを聞いたところで恐らく私は理解できないだろう。私が赤面するような甘い幻想を並べたてられたら、砂を吐いてしまいそうだ。

「私が聞きたいのはそんなんじゃない。ずっと不思議に思ってたんだ。レイは日本に来てから一度も驚かないなって。だって日本には初めて来たんだろう？　あんたの国とは大分違うだろうし、目を瞠るものや珍しいものが多くあるものだろ？　なんでだ？」

そう、私はずっと気になっていたのだ。

初めて日本に来たにもかかわらず、何を見ても驚くこともないレイを。かつて知ったる国を歩くように何物にも動じない姿に首を傾げた。

車を見て、信号を見て、飛行機を見て、電車を見て、高層ビルを見て、自分たちとは違うファッションを見て驚かないのか。

「王族はね、勉強させられるんだ。俺達の世界と繋がっている異なる世界のことを。日本のことに関することも小さい頃から学んでいたから驚かずに済んだ。とはいっても、乗り物や建物の大きさや高さを見て驚いたよ。だけど、驚きを外には出さないように教育されているんだ」

「驚いちゃいけないのか？」

「父上には、何物にも動じてはならないと言われてきた。それが王族には必要だとね」

例えば外交のときに、不安や恐れを顔に出すことは出来ない。相手に弱みを見せれば、交渉もうまくいかない。そういった帝王学や外交術を幼い頃から存分に身についているのだろう。

レイは無邪気なだけの男の子ではないのだ。

その無邪気さもレイの処世術の一つなのかもしれない。考えてみれば、こんなに無邪気な16歳はいるはずもないのだ。

「あんたはそれを苦痛だと思ってたのか？」

「考えたこともない。当たり前のことだと思っていたから。俺が王位を継ぐことはないだろうけど、それでも王族としての誇りは守らなければならなかったからね」

「あんたは偉いな」
短い一言を放った私に、レイは泣きそうな瞳を向けた。
「ありがとう」
レイがなにを思っているのか私には分からなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6743x/

無邪気な恋心

2011年11月7日13時00分発行